

説教題 生けるいけにえとして（神戸聖愛教会 小栗献牧師）

聖句 アモス書 5:18～24 ヤコブによる手紙 1:19～27

古代イスラエルという国は神を中心とする信仰共同体でした。ですから、神に祈り、神を賛美する「礼拝」という行為は人々の生活の中心であり、重要な位置を占めていました。

イスラエルの人々は安息日には仕事をせず、会堂で聖書のことばを学び、定められた主要な祝祭日にはエルサレムの神殿に詣でることが求められましたし、子どもが生まれたり、成人を迎えたら「通過儀礼」を神殿で行うことが義務づけられていました。

神殿には毎日多くの人々が集まり、神殿の前に置かれていた祭壇では犠牲の動物が焼かれて神さまに献げられました。神殿の内部では壮麗な礼拝が行われていました。司祭は聖書のことばを朗唱し、指揮者のもとに組織された聖歌隊が高らかに賛美の歌を歌いました。会衆と詩編を歌い交わすことも行われていて、わたしたちが礼拝で詩編を交読するのは、その名残です。そして角笛や豎琴などの弦楽器、笛やシンバルというさまざまな楽器が華やかに賛美を彩りました。

神殿での礼拝をユダヤの人々は喜び楽しみ、礼拝のたびにイスラエルの民であることに誇りを抱いたと思います。自分たちがささげる礼拝が神さまを喜ばせているだろうと、みんな思っていたでしょう。詩編の中にはそんな思いが表れている歌があります。

いかに楽しいことでしょう、主に感謝をささげることは。御名をほめ歌い、朝ごとにあなたの慈しみを、夜ごとに、あなたのまことを述べ伝えることは。十弦の琴に合わせ、豎琴に合わせ、琴の調べに合わせて。主よ、あなたは御業を喜び祝わせてくださいます。わたしは御手の業を喜び歌います。

さて、ところが、今日読まれたアモス書には何と書かれていたでしょうか。

わたしはお前たちの祭りを憎み、退ける。祭りの献げ物の香りも喜ばない。たとえ焼き尽くす献げ物をわたしにささげても、穀物の献げ物をささげても、わたしは受け入れず、肥えた動物の献げ物も顧みない。お前たちの騒がしい歌をわたしから遠ざけよ。豎琴の音もわたしは聞かない。

「祭り」とは神殿での礼拝のことです。神さまはイスラエルの人々が神さまに献げる礼拝を「憎む」というのです。よい香りをかいで喜んでもらおうと極上の動物を屠って焼き尽くしてもうれしくない。穀物の献げものも受け取らない。たくさんの楽器でにぎやかに賛美する歌もわたしは聴かない。それらをわたしから遠ざけよ！ なんとということでしょうか。イスラエルの人々の一生懸命な礼拝を、神さまはいっさい受け入れず、喜ばないというのです。

わたしは礼拝の専門家などではありませんが、これまで礼拝を充実させることを牧師としてのテーマとしてきましたし、神学部で礼拝学の授業を担当していたり、礼拝の専門誌の編集に携わってはおりますので、キリスト教の礼拝について質問を受けたら、それに答える責任ぐらいはあると思っています。そのような立場にあるものにとって、今日のこの聖書の言葉は恐ろしい言葉なのです。このアモスの預言は、そもそもわたしたちが礼拝をすることは、神さまにとっては無意味なことなのではないか？それはわたしたちの自己満足にすぎないのではないか？という根本的な問いをわたしたちにズバツと突きつけてくるからです。しかしなぜ神さまはこんなことを言うのでしょうか？この言葉に続けて神は預言者を通して言います。

正義を洪水のように、恵みの業を大河のように、尽きることなく流れさせよ。

ここで預言者は、その時代の社会において、正義が乱され、愛の業がこれっぽっちも行われていないことを批判しているようです。それは具体的にはどのような状況なのでしょう。今日の聖書の少し前を読みましょう。

**お前たちは弱い者を踏みつけ、彼らから穀物の貢納を取り立てる。お前たちの咎がどれほど多  
いか、その罪がどれほど重いか、わたしは知っている。お前たちは正しい者に敵対し、賄賂を取り、  
町の門で貧しい者の訴えを退けている。**

「町の門」は裁判が行われる場所でした。アモスは、政治に責任をもつ人々が貧しい人々を虐げ、年貢を搾り取り、正義を曲げ、すべてが金の論理で動いていることを指摘し、その横暴を批判します。

先ほども言いましたように、イスラエルは信仰共同体ですから、政治的な指導者と宗教的な指導者は重なり合っていて、「もちつもたれつ」というところがありました。神は預言者を通して、あなた方は弱者を痛めつけ、公然と悪を行いながら、その一方で美辞麗句を連ねて神を賛美しているのではないか、しかし、行動の伴わない礼拝には意味がないのだと言うのです。そんなものは形だけのむなしい行為でしかないし、自己満足でしかない。それは神を欺き、貶めることでもあります。なぜなら、神は信仰者に「正義を行うこと」を求めているからです。

神さまは決して礼拝行為そのものを否定しているのではないとわたしは思います。礼拝は、神がご自身の言葉をお語りになる時であり、わたしたちの祈りをきいてくださる時であり、わたしたちを祝福してくださる時だとわたしたちは信じています。そして神さまも、わたしたちがご自身を礼拝することを求めておられると信じて礼拝をしているのです。

神さまが、権力をもたず、貧しく虐げられている人々に対して語るなら、こんな言葉にはならなかったと思います。神さまのみこころに反する悪しきことを平気で行いながら、いけしゃあしゃあときれいごとを並べて礼拝して、悦に入っている権力者に対することばであるが故にこのような厳しいことばにならざるをえなかったのでしょう。

神さまが信仰者に求めるのは、口先だけの賛美や祈りではない。賑やかなだけの賛美ではない。神が求めるのは信仰者の生き方そのものであって、生き方と関わりをもたない礼拝には意味がない！礼拝は、そこに集う人々がこの世界に正義をもたらすために機能するものでなくてはならない。権力者が自分たちの行為を美化したり、不正を正当化するために礼拝を用いるようなことは絶対にあってはならない！そんな礼拝であるなら、神はそれを憎み、退けるのだ。アモスが言っているのはそういうことなのだと思います。

さあ、だとしたら、どうでしょうか。わたしたちが今、ここで守っている礼拝は、わたしたちの日々の生活と、そしてわたしたちの生き方とどのように関わっているのでしょうか？

今日の礼拝では新約聖書からヤコブ書のことばが読まれました。ヤコブ書の中には「**行いを伴わない信仰は死んだものです。**」ということばがありますが、そこによく表れているように、ヤコブの手紙は「行い」が大事だということを強調する手紙です。そのことは、使徒パウロがその手紙の中で、繰り返し、救いのためには「行い」ではなくて「信仰」こそが問題なのだと言い続けたこと真逆を行っているように見えます。

このヤコブの手紙は、パウロの手紙よりも後の時代に書かれていますけれども、ここには行き過ぎた「信仰義認」への批判があると考えられています。パウロは人は律法を守るという行為によってではなく、ただただ一方的な恵みによってわたしたちを義とするキリストを信じて従うその信仰

によってこそ救われるということを繰り返し、とても強く言いました。それはパウロの時代に律法を行うこと、とくに割礼を行うことを求めるユダヤ主義的な人々と向き合う中でやむを得ないことでした。パウロは律法を守ることによって義とされるということを認めるなら、キリストが十字架で死なれたことが意味を失ってしまうと考えたのです。

ところが時代がかわってくると、パウロの言葉を逆手にとって、「信仰さえあればいいのだ。行いはどうでもよいのだ。」と言い出して、好き勝手に、わきまのない生き方を正当化する人々が出てきたようです。そのことに苦言を呈する形でこのヤコブの手紙が書かれたと考えられています。

ヤコブは、神の言葉はただ耳できくだけでおわらせてはならない。行動の伴わない信仰には意味がない、というのです。神のことばを「ふんふんいい話だ」と聞き流すのではなく、その人の中で根付かせていかなければならない。神の言葉は、日々実践されることでその人自身のものとなっていくのだ。とヤコブは言います。

ではヤコブが考えている「行い」とは具体的にはどのようなことなのでしょう。それは決して英雄的な素晴らしい善行のようなことではありません。ヤコブが今日の聖書の中で例として言っていることはきわめて身近なことです。「舌を制する」こと、つまり言葉を慎むことです。

ヤコブ書はユーモラスでありながら、辛辣なたとえを用いて、わたしたちが使う「言葉」について語ります。たとえば舌は船の舵のようなものだと言います。舵は船全体から見たら大きな部品ではありません。でも小さな舵が何万トンもある巨大な船の方向を変えます。舌という人間のからだの器官についてもそれが言えると言うのです。舌はからだ全体から見たら小さな部分でしかないけれども、その舌が語ることばがわたしたちの生き方をも左右するということです。

さらにヤコブは舌は火だ、と言います。舌が産み出した火は広がって森をも燃やしてしまうことにもなりうるのだと言います。実際、何気なく発したことばが取り返しのつかない結果を生むことになるということは歴史上にもあったし、わたしたちもそれぞれに心当たりのあることではないかと思えます。「ことばの彩」ではすまないこともあるのです。

さらにヤコブは、ひどい言葉を口にする人は、火が森全体を燃やすように、自分自身をも燃やし尽くしてだめにしてしまうと言います。心ないひどい言葉をまき散らす人間がいるなら、その人の信心そのものが無意味だとまでヤコブ書は言うのです。

詩編にはこんな言葉があります。「**彼らは舌を鋭い剣とし、毒を含む言葉を矢としてつがえる。**」言葉は時に剣となり、人を刺し貫く毒矢となるということです。言葉には殺傷力があるということです。近年、言葉によるハラスメントやSNSによる言葉の暴力の問題がクローズアップされるようになりました。

とくにSNSやインターネットを通しての言葉は、面と向かって語らないために、よほど気をつけて使わないと、自分が思う以上に誰かを傷つけてしまいます。それは自分では扱いきれない武器ともなるのです。そしてネットの世界には愛のないことばが、それこそヤコブが言うように毒のようにまき散らされ続けています。その殺傷力を増していると言えるかもしれません。

キリスト教は言葉を大切にす宗教です。わたしたちは言葉によって神の救いを語ります。ことばを通して神に祈り、神を賛美します。そのようなわたしたちは、ことさらに自分が語る言葉についてよくよく考えなければならないということになるのかもしれませんが。

いずれにしても、ヤコブの言う「行い」とは、ほんとうにわたしたちの日々の小さな行為だと言

えます。

さて、今日の説教のタイトルはパウロによる手紙から取られています。**自分の体を神に喜ばれる聖なる生けるいけにえとして献げなさい。これこそ、あなたがたのなすべき礼拝です。**

パウロは、わたしたちがなすべき礼拝は、わたしたち自身のからだを「生きた聖なるささげものとして」ささげることだと言っています。「生きたささげもの」とは何でしょうか？

ここで言われていることは、今や、わたしたちがすべき礼拝は、かつて神殿で行われていたように生け贄の動物を献げるようなことではない。そうではなく、日々の生活の中でキリストの言葉を実行しようとするのがわたしたちの礼拝になるのだということです。それは大げさなことではなく、ヤコブが言うようなことばに気をつけるというようなことも含む日々の生活なのだと思います。そうであれば、わたしたちの「なすべき礼拝」は礼拝の時間が終わったところから始まるとも言えます。

今日はお昼に礼拝について考える時間をもつということでしたので、礼拝に関するお話しをしました。今日の聖書がわたしたち語ることは、礼拝が本当に礼拝になるために重要なことは、形式や芸術性のようなものではないということです。

わたし自身は大学時代に聖公会の儀式的な礼拝を知って、そこから礼拝に関心をもったということはあるのですが、厳粛であるとか整っていることの前に、根本的に問われるのは、わたしたちの礼拝と、わたしたちの生き方がどのように重なり合っているかということです。礼拝でしていることが、わたしたちの生き方、日々の生活と乖離していないかどうか、ということだとお見ます。ほんとうに正直な自分自身として神の前に立つ礼拝を守っているか。

礼拝は、神の前に立つことだと言えそうですが、その点では本当はわたしたちの全生活が礼拝であるべきなのかもしれません。でもそんなことはできないので、わたしたちは時間を区切って、その時間を信仰の仲間たちと共有して礼拝をするのだと思います。この限られた時間の中に、本来はわたしたちの日々の時間のすべてが流れ込んでくるべきだし、逆に礼拝での神との出会いの体験、わたしたちが聞いたことば、わたしたちが神に祈ったことばがわたしたちの日々の生活の中へと持ちだされなければならないとわたしは思います。

ですからわたしたちの現実の生活と、そしてわたし自身と、わたしたちの礼拝が本当につながっているかということを考えることが、礼拝を考えるということなのだろうと思います。わたしたちは自分自身のことばを礼拝にもちこむために新しい祈りのことばを探し、新しい歌を求め、また自分自身を表現できる礼拝の形式を考えるのだと思うんです。

一方で礼拝にはこれまで積み重ねられてきた歴史の中での信仰者の祈りや歌があり、その伝統から学ぶということもあるし、そこで形成されてきた礼拝式というものもあるわけで、過去から学ぶことも確かにある。そのような礼拝の形を受けつぎながら、それを新しくしていくリニューアルしていく。それが礼拝について考えるということなのではないかと思います。

さて、わたしたちは、自らを生きたそなえものとして自分自身を献げるようにとの促しのことばを聞きました。わたしたちは、生き方をもって神を礼拝するために、神さまからの祝福と励ましを受けて、今日もまた新たにこの礼拝堂から出ていくものでありたいと思います。